みず　ぐるま

水車

(財)新松戸郷土資料館館報　第9号

財団法人　新松戸郷土資料館

〒270 千葉県松戸市新松戸3－27

新松戸市民センター（三階）

電話　0473－44－1909

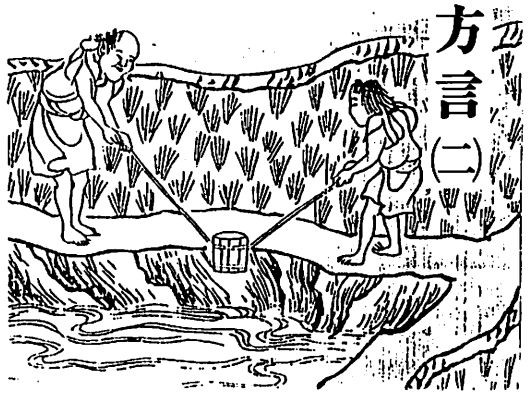
発行年月日　平成8年1月末日

もくじ

昭和46年5月最後の早苗饗 …… 表紙
大谷口新田（新松戸）

方言(二)
◇女化講・不動待…… 2
◇御忌・端午の節句…… 3
◇早苗饗・藻刈…… 4
◇浅間様・百万遍…… 5
◇お盆・あきまて…… 6
◇藁仕事・正月支度…… 7
◇日誌抄・館利用案内・編集後記…… 8

方言（二）



女化講（おなばけこう）

松戸の下谷一帯は江戸時代初期から開発された新田地帯で、米の出来具合はとても重要な事柄でした。稲の種を蒔く時に、女化（おなばけ）神社の砂をもらってきて蒔くと苗がよく育つという信仰があり、三月の吉日に女化講という講を行いました。

女化神社は茨城県龍ヶ崎市にあります。その由縁は助けられた白狐が女性と化し嫁となって家を繁栄させ恩をかえしたものの、子供に正体を見られて去ったという話なのです。狐は稲霊信仰をもとにした稲荷様のお使いであり、そのことから苗の成長につながっているのでしょう。

おっかあ「今年の女化講は三月十日だって、講元の綿屋のじいさが来て、いってたよ。差向橋に七時に集合して北小金の停車場から汽車で行くんだとよ。」

あにい「女化講って、なんだ？」

ちゃん「なあまど、よく立つようにって、昔から女化講にいって、お砂いただいて、なあまどにまいたんだ。お札を篠竹にはさんで立てとくと、ねえのできがいいってゆうだよ。」

おっかあ「めえに馬橋の停車場で汽車まってたら、軽便から二郷半弁の人達、いっぺえ降りてきて、下り線のホームで女化神社に行くっていっていたよ。あんなに人が出んのかとびっくりしたよ。」

ちゃん「ねえ、はずれちゃ、ていへんだも。」

あにい「女化って、どんな所だ？」

ちゃん「荒川沖駅から一時間ぐれ、どさかぶ道で、家もねえよ。一人じゃ、おっかねえな。だけど講の日は人がいっぺえ通るから、道しらねえでも行かれるよ。神社のけいどうは露店でいっぺえだよ。森の中のちっこい神社だけど、神社の前には二匹の狐が子狐をだいてるいなりさんがあんだよ。」

なあまど＝苗代
よく立つように＝よく育つように
ねえ＝苗
軽便＝流山線
二郷半弁＝三郷の言葉
どさかぶ＝けもの道みたいな
けいどう＝参道

不動祭

春三月。不動祭りが行われます。下谷では馬橋の万満寺の不動様にお参りします。万満寺の唐椀（とうわん）供養は三月二七～二九日に行われ（秋十月二七～二九日）参道には植木市や屋台が出て賑やかです。この日は仁王門のとびらが全部あけられ、三m近い仁王様を拝むことができます。中風除けといわれる仁王様の股くぐりも江戸時代から続いています。

ちゃん「朝っぱら西風吹きだしちゃって、大風になんねぇけら、いいがなあ。」

女年寄「だって、今日は不動待ちだも。昔からよく大風吹いたよ。やっぱり因縁だよ。御忌（ぎょき）（東漸寺の祭り）は天気よかんべぇ。仲が悪いってゆうから。」

おっかあ「しんぞっ子の時、不動待ちのけえりに大風で、せんべい屋のめえの橋んとこで、ふっとばされちゃうから、三人でへいつくばって渡ったよ。おっかねかったなあ。」

男年寄「馬橋の大火も三ケ月（みこぜ）の大火も、不動待ちの頃だよ。この頃は、ばかっ風吹いてよ。でえの畑の土は、へえみてえだから、ふっとんで空、真赤になっちゃうべえ。だからでえの人は、下谷は風っかげねえから、吹きっぱらな所はきれえだって。」

女年寄「仁王様の股くぐりすっと、中風になんねえってから、股くぐり

してくんべえか。」
しんぞっ子の時＝若い娘の時
けえり＝帰り
めえ＝前
へいつくばって＝はって
でえ＝台地
へえ＝灰
風っかげ＝風よけ
きれえだ＝嫌いだ

御忌（ぎょき）

四月になると下谷の人達にとって、東漸寺の御忌は大きな楽しみでした。東漸寺は小金にある浄土宗のお寺です。御忌とは、宗祖法然の法会のことをいい、四月二十五日に行われます。この日は稚児行列もあり、境内いっぱいに植木市や屋台がたち賑わいます。特に植木市は、この辺りでは一番大きいと言われています。また東漸寺は、しだれ桜の美しさでも有名です。

ちゃん「東漸寺の鐘は、いい音色だなあ。本土寺の鐘は下谷まで、とどかねえな。」
子供「ちゃん！　御忌に行くべぇよ。」
ちゃん「野良仕事におわれてっから、だめだ。じいちゃんに連れてってもらいな。」
子供「わぁ、すげえ人だ。店もいっぺえ出てるな。あっ！いいに*よいすんなあ。べーのによいだ。じいちゃん買って。」
じい「一本ずつ、もらいな。」
子供「ああ、うめぇ。もう一本ほしいな。あれっ！　もく*ぞうがに、いっぺえ売ってる。買ってよ。あのでっけえのがいいよ。」
じい「あれは雄だから、うまくねえよ。雌の方がいいよ。」
子供「おれ、でっけえのほしいよ。あの子みてえに糸で、はさみしばってもらうよ。」
じい「はさみもじ*けちゃあから、逃げられちゃべ。ふたのあるザル買ったから、この中にぼっこ*んで行くべよ。」
子供「糸でさげてくよ。」
じい「逃げられちゃべな。しらねーぞ。」
子供「あっ！はさみだけだ。あーあ。」
じい「だから、ゆう*こっちゃあね。おめえの分はねえぞ。めっけてもいねよ。堀っこにへっ*ちゃったべ。」
によい＝におい
べー＝バイ、ツブ類の貝
もくぞうがに＝もくずがに
もじけちゃあから＝とれちゃうから
ぼっこんで＝いれて
ゆうこっちゃね＝言わないことではない
めっける＝みつける
へっちゃったべ＝はいっちゃったよ

端午の節句

五月五日は端午の節句です。端午とは月の初めの午の日のことです。菖蒲や蓬など香りの強い植物に魔除けがあると信じ、これを飾ったり、身につけたりする風習が奈良朝の頃からあったようです。この日の行事には、武道や競技の類が多かったので、男の子の出生を祝う節句となったと言われています。第二次大戦後は子供の日となり、子供が丈夫に育つようお祝いします。
ここ下谷では、菖蒲や蓬を屋根にあげる「屋根しょうぶ」という風習があります。また柏餅をくるむ柏葉は、まだ芽ぶいたばかりで小さいので、昨年の葉を使います。新しい柏葉を使うとよい香りがするので六月五日に柏餅を作る所もありました。
あにい「今日は朝早くから、自転車にキャベツつんだ人がいっぺえ通るなあ。」
ちゃん「田植えのひよ*とり、頼みに行くだべ。でいの*方じゃ、まだキャベツ出来ねぇから、土産に持って行くだ。うちでも、あしたは人*廻しの八木のちゃんの家に行くべえ。」
おっかあ「野々下のとっちゃん、節句のけ*えし持って来てくれたよ。こんなに早く柏餅作るのたいへんだったなあ。」
野々下のとっちゃん「下谷の家じゃ、木の芽好きだから持って来たよ。」
ばあ「八ツ頭の子供、まだとっと

いてあるから、木の芽あい作るべぇ。筍もいいなあ。節句のごちそう出来しゃったなあー。」

おっかあ「*めえの堀に菖蒲はえてるから取ってこいよ。黄色の花咲くほうじゃなく、によい菖蒲だよ。取って来たら、餅草くっつけて、*神様なんかへ*あげちゃえよ。」

ひよとり＝人夫

でい＝台地

人廻し＝人夫の手配をする

けえし＝お返えし

めえの堀＝前の堀

神様なんかへ＝神様や仏様、屋根の上などいろんな所へ

あげちゃえよ＝お供えしなさい

早苗饗（さなぶり）

田植えが終わる五月下旬頃、下谷の各家々では、早苗饗（田植えがすんだお祝い）を行いました。

あんころ餅をついて荒神様に苗七束（戦後は簡略化して二束）と共にお供えをし、無事田植えが終わった事を感謝します。

その後、台地の田植えも終る六月中旬頃、早苗饗正月が行われます。豊作を祈って、親類、使用人、日雇い、手伝いの人と、あんころ餅や、野菜、魚の煮付けなどのご馳走をいただき、その日は休日となりました。

ちゃん「あしたで田植え終わんべぇ。」

おっかあ「じゃあ、今晩、糯米（もちごめ）ひやしておかねぇじゃ、あんこも作っちゃうべえや。」

ちゃん「今日は、大雨で水増えちゃって、はかどんねぇから、少し植え残っちゃうけど、さなぶりやっちゃうべな。*ひよとりは、さなぶり楽しみにしているもんなあ。家の人いれると三十一人になるなあ。買い物に馬橋まで行って来るな。」

ばあ「上がったらすぐへえれるように、*せいふる沸かしておくからなあ。」

ちゃん「苗（ねえ）は、いっぺえあるから、*ふかんぼは、*お苗にして植えるようになあ。お茶にあがったら、*佐野のあんちゃんに残ってもらって、餅ついてもらっちゃえよ。力あっから。」

じい「苗、二束よく洗って持って来いよ。荒神様にあげっから。」

おっかあ「濡れちゃって、さみかったべえ。湯わいてっから、へっちゃいよ。待っている人は釜屋であったまった方がいいよ。風邪ひかねえようにな。」

ひよとり「ひでえ雨だったから、乾いている所ねえよ。手かじかんじゃったよ。」

ちゃん「おかげで田植えも終った。ありがとうよ。なんにもねえけど、ゆっくりやってな。」

ひよとり＝日雇い人夫

せいふる＝風呂

ふかんぼ＝深田

おお苗＝多くの苗

佐野＝金ケ作の字名（あざ）

藻刈

ここ下谷は低湿地帯のため排水が良くありませんでした。そのため、二月～三月の渇水期には泥さらい、六月～九月にかけては藻刈りが行われました。泥さらい、藻刈りは坂川の本流については、村々の分担を決めて一斉に行い、小さい用排水路は村総出の共同作業でした。

おっかあ「今日は早苗饗正月だなあ。男達は藻刈り終わってからだって。」

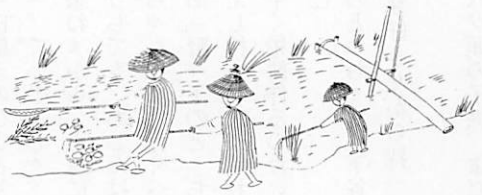
ちゃん「一番刈りだから、*いっぺえはいてるから大変だあ。」

あにい「どうして大谷口新田は九郎左衛門新田地先の添堀まで刈んなくちゃなんねえの。」

ちゃん「昔から添堀の普請はうちの村持ちだ。村どうしの取り決めあったんだべえ。」

あにい「おれ、いくよ。」

ちゃん「じゃあ、粗朶あげマンノウ持っていけよ。めえの溜の上にあ



っから。隣の家の人に、初めてだからよろしくっていうだよ。」
隣家の人「跡継ぎ*できしゃいいなあ。おれの刈った後、ひっかき上げろよ。」
あにい「ずいぶん重ていな。」
隣家の人「そんなにいっぺえひっかけちゃ、あがんねえよ。ひっかきよせておいて少しずつ上げんだ。」
あにい「腹減った。」
ちゃん「どうだった。」
あにい「あのマンノウ、使いよかったよ。中組の人何人かで、あんな雛*っ子、よく出すなあって、みみっこ*すり言ってたよ。」
ちゃん「村役に初めて出ると、皆よくいびられんだあ。」
あにい「五郎助五郎助って騒いでっから見ると、でっけい青大将いてびっくりしちゃった。五郎助稲荷*には、でっけいのいるって話は知ってたが、黒びかりしたヘビは初めて見たな。」
ちゃん「でっけいヘビ出ると大雨降るって話だから、降らねえでもらいたいもんだ。」
いっぺえはいている＝たくさん生えてる
できしゃ＝できて
雛っ子＝一人前でない人のこと
みみっこすり＝皮肉
五郎助稲荷＝旭町中学校の前にある神社

浅間様

七月一日は、新松戸七丁目の稲荷神社に祀られている浅間様の日です。信仰の対象として富士山をかたちどった築山の上に「冨士浅間神社」と刻んだ碑が建てられています。
この碑は、明治時代にあった碑を前の所有者の懇願により、元の場所に戻した為、昭和二十五年改めて神霊を祭祀して建てられたものです。
この浅間様の日には、白衣を着て金剛杖を持った参拝客が近在から集まってきました。
氏子一同は神社に集まり、草取り、清掃などをして清め、神具や御輿*などの虫干しも行いました。戦前は、それらの行事を各々日を決めて楽しみの一つとしてのんびりと行っていましたが、戦後になってからは一日で済ますようになりました。
あにい「そんなにいっぺえ粉ひきして何作るんだ。」
おっかあ「明日は浅間様だから小麦饅頭と麦焦し作って神様にあげんだあ。」
あにい「横手の方から白い着物きて、*ついついた人来るけど、あの人達はなんだ。」
おっかあ「富士講の人だよ。村々の鎮守様の浅間様を廻って拝んで歩く人だ。昔はもっといっぺえいたよ。」
あにい「浅間様ってなんだ。」
おっかあ「昔、富士山が爆発してこの辺りまで灰降らして、米とれねえかっただと。だから富士山が鎮まるようにって、どこの村も祀ったんだって。ちょうど新しい麦取れっから、小麦饅頭作ってくうだ。」
ちゃん「あの飾ってある棒は、め*えのじいさんが富士山参りに使ったついだって。*でいじにしてた物だ。」
つい＝杖
めえのじいさん＝先代のおじいさん
でいじ＝大事

百万遍

百万遍の行事の日に、穀物を食い荒らす害虫を追い払う「虫送り」という稲作儀式を行う所がありました。現在でも七右衛門新田、主水新田にこの行事が残っています。七右衛門新田では、採りたての蚕豆を食べる習慣があります。
大谷口新田では、七月十四日に、三月と同じ百万遍の行事を行いました。講中の無病息災、家内安全、豊作を祈願します。神社に氏子の女年寄と子供が集まり、円座になって、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えながら長さ七～八メートルもある大きな数珠をまわします。念仏の回数を数える人は輪の中心に座り、鉦を叩きながら数珠が一まわりするたびに木札をかえしていきます。
また、同じ日に宮なぎ（神社の掃除）をして、みこしや幟、提灯等を土用干ししました。

ばあ「おめえ、百万遍に行くか。」
あにい「百万遍って、なんだ。」
ばあ「百万遍ってのはな、でっけえ数珠を、念仏唱えながら皆でまわすんだ。」
あにい「面白そうだけど、子供もくんのかな。」
ばあ「年寄りと子供とでまわすだ。数珠の結び目、まわって来た時に隣の人の首にひっかけると、ひっかけた人は一年間病気しねって事だよ。だから結び目まわって来る頃は注意してねえとだめだ。」
あにい「なんだ、ひっかけられたらいけねえのか。ひっかけんのか。」
ばあ「おめえな、隣の人が、ぼけっとしていたら、手早くひっかけんだぞ。」
あにい「数珠なんべんまわすだ。」
ばあ「昔は一万回まわしたっていうが、今は千回だ。」
あにい「なんか食う物あんのか。」
ばあ「みんな、重箱持ちよりだからあるよ。」
でっけえ＝でっかい
しねって＝しないって

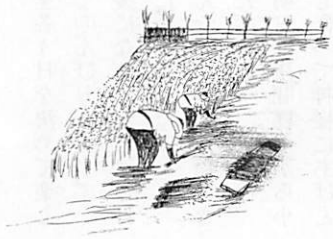
お盆

お盆は旧暦でとり行います。新盆の家では灯籠をたてます。十三日は迎え盆、十四日は墓参り、十五日は送り盆となっています。

迎え盆の二、三日前にお棚を設け、十三日の晩に仏様を迎えます。お迎えは早ければ早いほどよく、多くは墓に行きますが、途中の道辻や家の近くの曲がり角から迎えることもあります。持って行った提灯に灯をともしたり、かがり火を焚いて迎えたりしました。
おっかあ「ばあが、せいふるわいたってから、いしら早くへっちゃいよ。迎え盆だから。」
子供「なんで蘭塔場まで行かねぇで、けえどっつぁきで火もやすのか。」
じい「昔からここで迎え火たいて仏様迎えたんだ。家じゃお墓が上屋敷と平賀だべ。遠いし二ケ所だも。無縁仏だってやってくるべ。」
じい「早く線香あげて、ちょうちん灯ぃ入れて、『おいでなさい』って言って、ろうそく消さねぇように持ってけえんだぞ。」
おっかあ「でい所から、あがっちゃだめだ。めえからあがれ。」
子供「かなだれ、水入れてあっけど、だれ使うんだ。」
おっかあ「仏様が足洗うだよ。」
じい「みんな仏様に線香あげて拝むだ。静かにすんだぞ。仏様は明日は早く高野の施餓鬼にいっちまうだ。」
子供「仏様は忙しいだな。」
じい「十五日は送り盆だもんな。」

せいふる＝おふろ
いしら＝子供ら
蘭塔場＝墓地
けえどっつぁき＝私道先
けえんだぞ＝帰るんだぞ
でい所＝台所
めえ＝前　玄関
かなだれ＝かなだらい

あきまて



大谷口新田では、秋の農作業の稲刈り、おだかけ（又は、かっぽし）、脱穀、もみほし、もみすりをまとめて「あきまて」とよんでいました。米の出来、不出来は気候によって大きく左右されます。ですから、早稲、中稲、晩稲とずらして生産しました。うるち米の生産は自分の家で使うくらいで、後は糯米を作っていました。糯米は江戸川餅（六和餅）と呼ばれ東京の三越や白木屋と契約して好評を得ていました。
ちゃん「早稲、かっきっちゃうまでは、かっぽしでやりていなあ。こんな日は露きれたら、刈るより早めにひっくるげえして、早昼食って、まてちゃうべや。」
あにい「もう（栃木の）日光っつあきから入道雲出てきたよ。」
ちゃん「もっから出るのはこねよ。大山っつあきから来るのは早えから、おっかねえからな。」
あにい「かっぽしは雷様くると、みんな浮いちゃう。のろしゆって架けんじゃ、重くって十倍も手間かかって大変だもの。」
おっかあ「今朝はもう雨降ってきしゃったよ。早く起きろよ。いくらでもまてろよ。濡れねえうちにな。」

あにい「かっぱしの水くった稲はやだよ。はんぱ水はきらいだ。もう少し降れば、おっぺし舟使いるけど。」

かっきっちゃう＝刈り取る

かっぱし＝刈り取った稲を田の上に広げて乾燥する

まてちゃうべや＝束ねて家へ運んじゃおう

もっから＝むこうから

のろし＝おだがけ。稲架にかけ乾燥させる

おっぺし舟＝押し出し舟。稲を積んで人が押す小さい舟

藁仕事

水田地帯では、冬の間は秋に収穫した米、豆等を入れる俵や縄などの藁細工を作るのを習わしとしていました。若い女の子は、「秋まて」が済むとお針場で和裁を習って嫁入り修業をしました。

ちゃん「どっからか、むしろっぱたきの音すんなあ。」

ばあ「どこのしんぞっこも、早くお針に行きてがって大変だべ。あそこの家じゃ、明日からやんだべえ。」

おっかあ「細縄なえするから、藁打ちしてや。」

ちゃん「五束うけとりだ。藁打ちは、あったまるからな。やっぱり冬の仕事だ。」

じい「なんだか、へぶく色の空になっちゃった。雪でも降んのかな。」

ちゃん「ひやひやさみいもん、あぶねえよ。まわしといて、藁すぐりやっちゃうべよ。」

おっかあ「あったまるように、今夜は鯰汁にすんべえ。大根葉どこに干してある？」

ちゃん「稲荷様のけいどの栴檀の枝に干してあんべえ。おいっかぶ出す迄には藁仕事終わらしてえなあ。」

むしろっぱたき＝秋の農作業の最後に、筵のほこりを落とし、よく干して保管した

しんぞっこ＝娘

へぶく色＝焚火の中に水をこぼすと灰と水蒸気がたちこめて灰色になる。その色のこと。

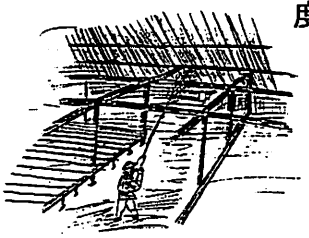
まわしといて＝準備しておいて

藁すぐり＝葉の下葉（しぶ）を取ること

けいど＝私道、参道

おいっかぶ＝よしずで霜除けした小かぶ。二、三月が旬

正月支度



暮も追しつまると、正月を迎える為に煤払い、餅つき、晦日祓いの行事があります。昔は、どこの家でも薪を燃やしていたので一年分のほこりと煤は大変なものでした。家中の物を庭に運び出し、笹竹をほうきにして、一家中で煤を払いました。

大晦日には「晦日祓い」の行事があります。神社から幣束をいただいてきて家の中の悪い物を追い出すため部屋中を祓い清めます。祓い終えた幣束は川の土手にさすそうで、この行事は現在も行われています。

おっかあ「今日は松戸の市だ。煤払いは流山の市までにやんなくちゃ。」

ちゃん「今日はおめえらも煤払いの手伝いやれな。そんな物見てねぇで。」

子供「ちゃんの体みてみろ。煤だらけで、黒んぼみてぇだ。」

ちゃん「天井裏の煤、かますに二へいもあったよ。今年は松葉燃やしたから、よけひでよ。」

おっかあ「煤きれいにしねぇと餅つきの時に、餅の中におっこっちゃ、困んもんな。」

ちゃん「煤は毛穴にへっちゃうから、三、四日落ちねぇな。煤払いの日は、芋がらめしって昔から決まってるな。」

ちゃん「餅つきは二十八日にやんべ。今年は三俵半つかなくちゃ。餅つき終われば、お飾りやるだけだ。」

おっかあ「いよいよ大晦日だ。あにい、戸護りのお札を、大戸と裏のとぼにはれよ。お祓いやれば今年の行事は終わりだから、その幣束は坂川の土手にさしてこいよ。」

松戸の市＝十二月十八日（流山の市＝十二月二十五日）

かます＝わらのむしろを二つにして袋にした物。穀物・塩・石炭などいれるのに用いる

よけひでよ＝よけいひどいよ

とぼ＝出入口

日誌抄

平成7年

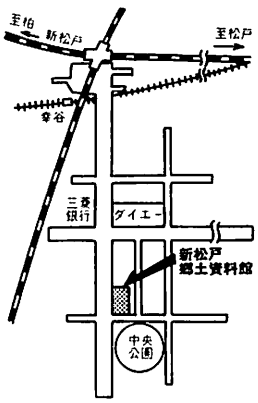
1・6	全体会議
〃・18	新松戸北小学校三年生来館
〃・19・20	新松戸南小学校五年生来館
〃・25・26	横須賀小学校五年生来館
〃・27	新松戸南小学校三年生来館
2・1	全体会議
〃・4	新松戸西小学校三年生来館
〃・8	研修（筑波・国土地理院）
〃・15・22	流山市役所来館
〃・24	研修（吉野梅郷）
3・1	全体会議
〃・8～10	馬橋北小学校三年生来館
〃・9	流山市区画整理課来館
〃・17	松戸市社会教育課来館
	新松戸北小学校卒業式・館長出席
〃・23	環境庁　国立公害研究所春日博士に面談
〃・24	松戸市社会教育課来館
〃・30	理事会
4・5	全体会議
〃・13	松戸市社会教育課来館
〃・14	館報8号刊行
〃・28	新松戸南小学校三年生来館
5・3	全体会議
〃・10	横須賀小学校三年生来館
〃・12	松戸市社会教育課来館

5・18	川のシンポジウム・館長出席
〃・19	新松戸西小学校三年生来館
〃・21	松戸市社会教育課来館
〃・26	新松戸北小学校三年生来館
〃・29	理事会
〃・31	松戸市社会教育課来館
6・7	全体会議
〃・8	ビデオ撮影
〃・10	館長講演（西馬橋環境を守る会）
〃・14・16・21	馬橋北小学校三年生来館
〃・21	研修（葛西臨海公園）
〃・28	小金本町婦人会来館
	新松戸南小二年生来館
7・5	全体会議
〃・11	研修（茨城自然博物館）
〃・15	松戸市教育長来館
〃・22	上総掘見学（21世紀の森）
〃・26～27	第12回子供歴史教室
	松戸ケーブルTV撮影
〃・29	ビデオ撮影（大杉様）
8・2	全体会議
〃・10	朝日新聞社取材協力
〃・24	松戸市社会教育課来館
〃・29	研修（松戸市立博物館）
〃・30	臨時役員会開催
	研修（大谷口　畝堀）
9・6	子供歴史教室再会日
	全体会議

9・17	「川をきれいにする推進本部」会議・館長出席
〃・22	「新坂川をきれいにする会」会議・館長出席
〃・27	和名ケ谷小学校先生来館
	読売新聞松戸支局来館
〃・30	ビデオ撮影
10・1	八ケ崎小学校・大橋小学校先生来館
〃・4	全体会議
〃・6	館長講演（和名ケ谷小学校）
〃・11	八ケ崎小学校四年生来館
〃・13	東葛地区社会教育連絡協議会より表彰を受ける
	月刊新松戸誌取材に来館
〃・14	流山青年の家来館
	館長講演（どろんこ塾）
11・1	全体会議
〃・2	小金老人会来館
〃・7	研修（渡良瀬遊水池）
〃・20	各界懇談会・館長出席
〃・26	吉川町教育委員会来館
12・5	研修（東武美術館）
〃・6	全体会議
	展示替え（教科書→着物）
〃・13	骨密度検査
〃・17	松戸北子供劇場催し物協力
〃・26	坂川シンポジウム参加
〃・27	仕事納

〈資料館利用のご案内〉

▽開館日　毎週水曜～日曜日
▽時　間　10時～16時（ただし、入館は15時30分迄）
▽入館料　無料
▽所在地　松戸市新松戸3－27
　　新松戸市民センター3階
▽電　話　☎44・1909



編集後記

方言のシリーズ(二)が出来上がった。農事・行事などを中心とした家庭内での会話を方言で収集した。

気象と切り離せない一年間の忙しい農家の仕事、一家総出の農作業など、昔の大家族での暮しぶりが垣間見られた。